

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：13501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24659999

研究課題名(和文) NICUを退院した子どもをもつ親の親子関係形成過程における思考と感情の検討

研究課題名(英文) Thoughts and Emotions of parents in establishment of a parent-child relationship with infants discharged from NICU

研究代表者

安藤 晴美 (ANDO, Harumi)

山梨大学・総合研究部・講師

研究者番号：20377493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：低出生体重児の母親は【予期せぬ早産への戸惑い】の中で出産し、そして、子どもの命が助かって網膜症による盲目、脳障害による歩行困難や知的障害など【後障害への不安】を抱え続けている。この中でも【子どもと通じ合っていることの実感】をし、【母乳をあげられることの喜び】などを感じることができている。子どもの退院後は、外出の際に「小さくない?」「かわいそう」と事情を知らない【他人の一言による傷つき】体験もあるが、子どもの順調な発育、心配されている後障害が見られていないことにより【子どもの成長への期待】がもてるようになってきている。

研究成果の概要(英文)：Mothers of low-birth weight infants had to go through delivery in [confusion toward unexpected premature labor], and even if the infants were saved, they continue to [feel anxious about impediments] such as blindness due to retinopathy or walking difficulty and intellectual disability due to brain disorder. However, even under these circumstances, they can feel [communicating with their infants] and [pleasures in breastfeeding]. After hospital discharge, they may be [hurt by comments of others] who have no idea about the situation and say "why is your baby so small?" or "that's a pity", when they go out. However, the mothers start having "hope for their infants to grow" after seeing their steady growth without any impediments that they had been worried about.

研究分野：小児看護学

キーワード：NICU 低出生体重児 親子関係形成

## 1. 研究開始当初の背景

近年の周産期医療の進歩は目覚しく、早期治療が可能となったため、極低出生体重児や超低出生体重児を代表とするハイリスク新生児の出生率が年々増加してきている。これらの医学的リスクをもって生まれた子どもは成長・発達過程において何らかのリスク要因を持ち続けることが多い(中村ら, 1995; 中村ら, 1999)。

また、そのリスクをもって生まれた子どもは医学的あるいは家庭環境、社会環境に関して不利益な条件をもつ子どもである(山口, 2001)ともいわれ、子どもの命が助かり退院を迎えたとしても、親子関係が形成されていなければ、退院後に親がよりいっそう育児に困難を感じ、それらは子どもの虐待につながる可能性も考えられる(木下, 2002)。新生児医療における看護の役割は、ハイリスク新生児の命を救うことだけでなく、親子関係を時間と共に形成していけるように支援することである(馬場, 1991; 仁志田, 2000)。

NICUに関する研究においては、「母親の子どもに対する思いに関すること」「親の心理的援助」「親自身が求めている看護援助」「親子関係形成への援助」「子どもの障害に関する母親の受容プロセス」等が報告されている。しかし、NICUを退院した子をもつ母親または父親、あるいは父母の両方(以下、親とする)が親子関係を形成していく過程の中で、どのような思考や感情を抱いてきているのかを明らかにした研究は数少ない。そこで、NICUを退院した子どもをもつ親が、子どもとの関わりを通して経験しているその時々での思考や感情を知ることにより、親への支援のあり方を考える必要がある。

## 2. 研究の目的

NICUを退院した子どもをもつ親の妊娠中、出産、育児の経験から、親子関係を築いてきた過程を理解するとともに、その過程の時々でいかなる思考や感情を抱いてきているのかを考察し、子ども虐待の予防を目指した親子関係形成への支援の方法を明確化することである。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究の対象及び場所

総合または地域周産期母子医療センターに入院経験のある、退院後のフォローアップ外来に通院中の子どもをもつ親に対する面接調査を行う。

対象は、上記のNICUを退院後1年以内のフォローアップ外来に通院中の子どもをもつ親であり、研究協力が得られた母親または父親、あるいは父母の両方である。

### (2) 研究期間

平成24年5月から平成27年3月末まで。

### (3) データ収集の方法

総合または地域周産期母子医療センターへ研究の協力および依頼をし、2施設以上から研究協力を得る。

対象は、超低出生体重児または極低出生体重児の親とし、予後に影響を及ぼす可能性のある疾患のない方を条件とする。研究の承諾が得られた場合には、対象となる親が都合の良い日時と場所を約束する。その約束の日時に指定の場所へ伺い、面接をする。面接前に研究目的および趣旨を説明し、同意書のサインにより同意が得られたこととする。

データ収集は、子どもの妊娠中、出産、子どもの入院中、子どもが退院してからの生活の中で経験してきたことの思考や感情について半構造化面接とし、その内容は許可を得て録音する。

### (4) データの分析方法

録音した面接内容は逐語録に起こす。そのデータの中から、親子関係形成に関して語っていると思われる文脈を抽出し、前後を読み、必要時には言葉を補足し再構成する。これらを内容の類似性、相違性に基づいてカテゴリー化し、親子関係形成の過程における親の思考と感情を検討する。

## 4. 研究の成果

A県の近隣の総合周産期母子医療センターに入院経験があり、退院後のフォローアップ外来に通院中の子どもをもつ母親7名および2組の両親と面接をすることができた。以下に、親の語りを「」で、思考や感情を【】で表し検討結果を報告する。

### (1) 妊娠から出産までの経験

「前回2回流産ということがあったんで...」  
「最終的には体外受精と顕微授精をして、3回目のできた子なんです。...だから、欲しくてもう、妊娠が分かったときは飛び跳ねるぐらいの嬉しさだった」などと、妊娠までの経過はそれぞれであるが【妊娠できたことの嬉しさ】を語られていた。

「お兄ちゃんは普通に産んだんで...だから2人目も...普通にいけるかなっていう思いはあったんですけど、20週のときに健診行ったら、もう子宮頸管が(開いてて)...『膜が見えちゃってる』と言われて...」  
「救急車の中で『早く旦那さんをお願いします』と言われて。私は元気なだけだなあ...なんかの間違いじゃないかなという気がしていた...」と、【予期せぬ早産への戸惑い】を覚えていた。また、「おなか痛いとか出血したとかそういうのもなかったんで、本当になんにもなくて突然『今日入院』って言われて。...あのとき安静にしてればとか、どうだったとかこうだったとか考えてもしょうがないんですけど、ずっと何となくもっとちゃんと産みたかったなっていうのはあります」と、【避けられなかった早産への後悔】をしていた。

母体の管理入院が強いられ、きょうだい児がいる場合には、「...絶対に病院に連れて来ないでくださいって、本当に丸1か月一切会わないでだったんで...向こうも突然私も居なくなっちゃったから、しばらく泣いてたみたいですけど。...ママが必要な時期って決まってるっていうかあるのに、ママが居てあげられないのがすごいごめんっていうか、こんななっちゃって...」と、【上の子との親子分離への申し訳なさ】や、「(上の子に)会ったら会ったで、また離れなきゃいけないじゃないですか。居られても1時間とかでまた別れなきゃいけないから、それを思ったらいっそ会わないほうがいいっていうふうに思ってたっていうか...」と、【上の子との親子分離中の葛藤】をしている。

### (2) 出産から現在にまでの経験

#### 子どもの急性期

避けられなかった早産は、緊急帝王切開であ

ることが多く語られたが、分娩形式にかかわらず「そこでみんなが『おめでとう』って言うてくれたときに、自分では、あ、やっぱりよかったんだなってちょっと思えて、命あるだけでもとかって、すごくそこで思えたんですけど、それがなかったら切り替えがいつまでもできなかったっていうか...」と、【祝福による早産への納得】したと、一つの転機と捉えていた。そして、「『産まれました』って言われたんですけど、産声が聞こえなくて不安だった...後から看護師さんから言われたときにはちょっと泣いたみたいで嬉しかった」、「なんか管がいっぱい付いていて、辛うじて生きている感じに見えちゃうので...」と、子どもが生きていることを確認すると同時に【子どもの生命への不安】を抱いていた。

子どもの出生後間もない時期には「いっぱい触ってあげてくださいって、いろんな看護師さんに言われたので、いつも面会に行くと、たくさんこう背中とかにパワーを送るように触っていました」と、【子どもの生命力への祈り】を続け、「人工呼吸、チューブ、薬とか点滴とかつながれて一生懸命生きようっていうふうに頑張ってる姿見て...」と、【子どもの生命力への感動】をしていた。

#### 子どもの予後

出生後の経過では、「生まれて3日間脳出血がなければ大丈夫って言われたんですけど、3日目に脳出血起こして...歩けないかもしれない、麻痺が出るかもしれない、知的障害が出るかもしれないとかって散々『覚悟してください』って言われて、最初はやっぱり命がって言うてたけど、できれば歩いて欲しいとかって思う...」  
「網膜症でレーザーやってるんですけど、それももう見えないかもしれないとか...そのきはそのときでと思いながら様子見てくしかない」と、【後障害への不安】を抱え、「パーセンテージを教えてくれとか、どういうリスクがどれだけあるかということだけは、お医者さまから説明がある...知らないから余計に怖いですよ。最悪、盲目になると言われたら、知らないけれどどう勉強したらいいんだろう...ネットは怖いし」と、【病状の情報収集することへの葛藤】もしていた。

こうした思いの中でも「普通に産んでれば普通に生きられたのに、...産んだときはもう命があってよかったってそれで済むんですけど、NICUに入ってから、この子の人生って考えたときに、...これからどうやって生きていくのかって考えたときに、目も見えないね、足も歩けないのって考えたら、本当にかわいそうなことをしてしまったと思って、ずっとそういう思いできてたんですけど、おっぱいをあげたときに、ああうちの子がと思って、...あーなんかもう本当にかわいいなっていうか、まあいいやって、こんなにかわいいからまあいいやって思えるようにそこでなつたんですけど...」と、【子どもと触れ合えることでの切替】をして前に進めている親もいる。

#### 子どもの入院生活

子どもの生理的体重減少がある時期は、「(管がとれたときも)嬉しいですね。ああ、頑張っているなあ。...でも、初めのほうは体重は毎日ガクンとまた減るので、みんなが減るって分かっているけど、元が少ないだけに...量るとちゃんと看護師さんが教えてくださるので。聞きたいような聞きたくないような気持ちを毎週繰り返し...」と【子どもの体重増減による一喜一憂】している。また、「GCUに行って、これで退院が近くなったなって思ってたら、やっぱりなんか、呼吸からきたのか分かんないですけど肺炎になっちゃって、またNに逆走して、そこからまた大変で...先生や看護師さんにお任せしますって言うしか親はないので」と、【子どもの不調による落胆】を繰り返している。こうした入院生活は数か月続くが【子どもの様子を知ることでの安心】するために「毎日来て1時間でも、ちょっとでもYに会いに。でもちょっとでも休もうかなって思うと、やっぱりなんかあるんじゃないかっていう不安もあったから、行かないで後悔するよりも行ってちょっとでも見て手握ったり頭なでたりしようって」と、面会をしている。その中で、「話し掛けているうちに分かってきてくれるんですよ。触らなくても保育器の前に居ると、来たなっていうのはそぶり、親ばかですけど分かって。表情がにこにこって」と、【子どもと通じ合っていることの実感】をし

ている。毎日の面会に行けない親からは、「赤ちゃん見て、日付書いて、今日はこんな感じでした、でもこういうところが不安なんですけど、これってどうなってるんですかみたいなことを書いて残しておく、次回行ったときまでに看護師さんとかがかかわいく、今日はこんな感じでいっぱいミルクも飲んで、おむつも何回くらい換えて、今日はこんな感じでニコニコしてましたよって、元気に動いてましたよって書いてくれるから。...それを見ると、こんな感じだったんだっていうのを書いてくれてたから、それは気持ちのケア的にも嬉しかったですね。不安なこととかあっても、そこに書いたりとかして...」と、担当看護師との【交換日記への感謝】もしていた。

また、母親は【早産したことへの償い】として「おっぱいだけは、今の私がしてあげられる最大限のことかなと思って...いろんな免疫が、私は本当にもう産んでしまったことがすごく後悔して、この子に今できることはおっぱいを搾ることしかできないからと思ってひたすら...」と語られている。これらの努力は、「凍ったやつをためて直接看護師さんに渡しているんですけど、これでまた飲んでもらえるんだとか、そういう喜びは少しはね。母としてそれぐらいしかできないんだというところで...3時間おきとか(搾る)」と【母乳をあげられることの喜び】にもつながっている。子どもの成長に伴い、「口から飲ませるようなことができるようになってからでも、やっぱり波があって飲んでくれないこととかもあって、そういうときには落ち込んだり大丈夫かなと心配にはなる」と、経口哺乳の【授乳量による一喜一憂】している。これらの母乳に関することとして、「一番感謝しているのはマンマケア。...早く生まれていると、その分おっぱいも心配で。退院したときにあげたいっていう思いがあれば、その間をちゃんとケアして下さったので。ここはいいんだよってことを周りの人にすごく言われて、そこは感謝しています...頑張って。完全(母乳栄養)に...哺乳瓶では飲んでくれず。(哺乳瓶が)嫌い」と、看護師による【乳房ケアへの感謝】をあげていた。

## 子どもと一緒に生活

退院が決まる頃には「おっぱいも飲むし、...かわいくてね、この子を私持って帰る権利があると思うとちょっと嬉しくて」、「やっとうやあって抱っこできるし、Yちゃんってベタベタできるし。嬉しかったですね」と、退院後は「急に成長したんです。やっぱり、おうちっていいんだなと思った。...そんなに飲んでいるのかなという感じなのに、ポンポンと大きくなってきて、退院して1,2か月は1日に40gぐらい増えていたんじゃないかと」、「連れて歩くだけでも幸せというか。家に居て『ああ、かわいい』と相手をしているときは、また違う幸せというか...。なんか私、お母さんみたいだねとか...」と、【子どもと触れ合えることでの喜び】を実感していた。また、「大変なことも...泣きやまないとかね。...本当に寝ないというのが1,2日あったぐらいで、あとは少し寝てくれたので。多分、楽に子育てをさせてもらっていると思って...」、「騒ぐだけ騒いでばたんコースなんで。...騒いでるときに一緒に騒いであげて、遊んであげて。...大人の中に入っても泣かないし、にぎやかな中でも落ち着いて寝れちゃうし...」と、【育てやすさの実感】もしていた。その反面、「退院してから...とにかくすごい大変だったんで...夜7時とかになると、すごい泣くんですよ。3時間ぐらい泣き続けたりとかして。あともう、抱っこ以外では寝ないとか。下ろすと起きちゃうから...」、「4か月くらいですかね。3か月くらいがピークで、4か月くらいで落ち着いたのかな。...一日中抱っこ。お昼寝も抱っこじゃなきゃ寝なくて。やっとうけるようになったのが8か月ぐらいで...」と、【子どもの啼泣への困り】を語りもあつた。

親は、子どもが低出生体重児であったことから「単なる風邪だとしても、熱が出たときとかも他の子より弱いんじゃないかという勝手な思い込みがあるので、...気管支炎になりかけてこっちに入院したときもあるんですけど、...やっぱり小さく生まれているからかかりつけへ行けてなっちゃうよねと。やっぱり病気をすると、そこは心配な...」、「熱？を出した？でもまあ、そんなに慌てるようなこともなさそうだという

ことで、確か次の日に病院へ行ったのかな。目の前にして、あたふたして何かあったらどうしようと思うよりは、行動してしまったほうがいい」と、【子どもの健康への心配】をしたり、「いっぱい食べ過ぎてるんだらうけど戻すこともなく、全然平気なんですよ。1回おなか下がったぐらいで、でも1週間で治ったし...」と、【子どもが健康であることの安心】をしている。

子どもの成長や生活を維持するための外出をする機会は増えていくが、「『何か月？』と聞かれて『3,4か月』と言うと『わあ、小さい』って言われ...だから小さいんだっていうのも、少し分かってほしい自分の気持ちもあるんですけど。『あっ、小さいのね』と知らないで言ってくれていても、そうだね小さいよね、ズキズキという繊細な時期も初めのほうはあったんですが...」、「『こんな小さい子、連れ歩くの？』って言われて、『いや、もう4か月なんです、実は』って言っても、『え？小さ過ぎじゃない？』って言われて、『ちょっと小さく産まれたんで』とか言っても、『かわいそうね』って言われたりとかして。かわいそうな子を産んだつもりはないんだけどなとかって思いながら、自分が一番この子に対して申し訳ないなっていう気持ちはこれから先もずっと思っていくんだらうなって思うけど。周りから見るとかわいそうだって思われるんだとか思うと、一番言われたくない」と、【他人の一言による傷つき】体験をしている。一方で、「1人目でこんな状況だったら多分本当家で引きこもって、公園に連れて行っても誰かに聞かれるじゃないですか、何歳？とか何？とか言っても、説明しなくちゃならないとか、月齢と見合っていないから、なんかそんなところもきつと面倒くさいと思うだらうなあと思ったんですけど、結局お兄ちゃんが公園に行く...そうすると『ちょっと早く生まれちゃったのよ、ははは』ってか言っても、スルッて話しできたりとかするんで...」と、【上の子がいることでの救い】を語られていた。

また、「二重生活してるんでS行ったり。子どもに同年代と遊ばしてあげられないっていうのはちょっとかわいそうだなと。でも同じくらいの赤ちゃん見ると喜んで向かってっちゃって、友

達になろうっていうふうに行くから、それはよかったです。全くそっぽ向かないから、お友達って分かってるんだなって」と、親は子どもの成長に【同年代の子どもとの関わり合い】を大切にだと考えている。そして、「次はいつ歩いてくれるかっていうのが。つかまり立つまではふういってできるようになったんで。...あとはいつ、言葉でもママって言ってきてるんだらうか分からないけど、...ちゃんとママとかお母さんとかいう言葉を楽しみに今待ってるんですよね」、「途中で本当に麻痺が出てきちゃってとか、この子歩けるのかなとかどうなのかなとかって、ずっと多分またそこで悩んでたと思うんですけど、本当にありがたいことに散々いろいろ言われた割には無事に成長してるから、...今だから思えるんですよね」と【子どもの成長への期待】がもてるようになっていっている。

### (3) 親と関わり合う人々との経験

母親と父親の夫婦としては、「私の夫は...、そのときはそのときで、だから結構助けられたりもするんですけど、そのときはそのときで、またいいじゃないか、別に大事に育てれば別に歩けなかったっていいし、車いすだってね、そうやって生きてる人もいくらでも居るんだからとかって言われて」と、【夫婦の支え合い】があり、その時々を乗り越えてきている。

また、「入院中はずっと会えなかったんで、父母も義理の両親も、言わなかったけれども、どんな子なんだろうかと恐ろしいという漠然としたイメージというか。また、昔の人なので、どういうハンディを抱えているのか、どういう子なのかっていう怖さはあったんじゃないかと思います。けど、いざ退院してみたら、もうメロメロでかわいいねって」と、【祖父母に可愛がられることでの安心】している。また、「たまにですけど、母が遊びに来てくれたりとか。...結構気軽に来てくれますね。すごい助かります、本当に。家事するとき見てもらえるだけで。全然違いますね。本人(子ども)も嬉しそうなんで」と、【祖父母の協力への感謝】している。

入院中の親同士の関わり合いとして、「ママたちともやっぱり同じ境遇を味わってきたし、搾

乳室でお友達になれて子どもの成長をみんなですね。『Yちゃん大丈夫ですよ』って他のお母さんからも聞いたり...」と、【他児の親からの支え】がある一方で、「一緒に頑張りましょうねとかって言っても、差ができちゃったときにすごくそこって影響するんだなと思って、あんまり仲良くなれないなあって。...NICUも片方はすごい元気で、片方は障害がとかってなったときに、それはそれでまたお互いにつらいかなとかって思って」と、【他児の親と知り合うことへの遠慮】することも語られている。

### <引用文献>

馬場一雄(1991): ハイリスク児の概念と定義, 小児内科, 23(1), 5-7.

木下千鶴, 砥石和子(2002): 看護者とのかわりりと面会時のケア, 小児看護 25(9), 1238-1242.

中村肇, 上谷良行, 小田良彦, 他8名(1995): 超低出生体重児の3歳時予後に関する全国調査成績, 日本小児科学会雑誌, 99(7), 1266-1274.

中村肇, 上谷良行, 芳本誠司, 他12名(1999): 超低出生体重児の6歳時予後に関する全国調査成績, 日本小児科学会雑誌, 103(10), 998-1006.

仁志田博司(2000): 新生児学入門(第3版), 医学書院, 東京.

山口規容子(2001): ハイリスク児の概念, 母子保健情報, 43, 4-7.

### 5. 主な発表論文等

該当なし

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

安藤 晴美 (ANDO, Harumi)  
山梨大学・総合研究部・講師  
研究者番号: 20377493